

No.5	提 案 名： つながりができる居場所づくりプロジェクト ~居場所づくりから始めるスーパースマートシティうつのみや~	
	提案団体名：宇都宮共和大学 陣内ゼミ（2・3年生合同）	
	所 属：宇都宮共和大学シティライフ学部	
	代 表 者：富岡 涼介	指導教員：陣内 雄次
メンバー	3年 松本 彩花 高橋 凌 藤田 虎流 妻木 えりの 上野 聖夜 菅又 美優 中田 芽依 武藤 咲弥	2年 皆川 雅斗 三宅 涼 平野 心暉 関戸 魁皇 田山 健太郎

○ 提案の要旨

これから少子超高齢化が深刻化するであろう宇都宮市にとって、スーパースマートシティ（以下、SSCとする）は重要な施策の一つである。「地域共生社会」「地域経済循環社会」「脱炭素社会」の創造を目指すことで持続可能な都市を構築することがその目的である。SSCに提示されている3つの“社会”はいずれも重要であることは言うまでもないが、少子高齢化ということを念頭に置けば、まずは「地域共生社会」を重点的に目指すことが肝要であると考えられる。このため、本提案では、駄菓子屋活動をベースとする居場所づくりと、そこで展開される“SSCすごろく”を宇都宮市39地区に広げること、SSCへの市民の理解を深めるとともに、SSCが目指す「地域共生社会」づくりの機運を高めることを目的とする。

なお、以上のスキームの推進においては、宇都宮市内の大学、専門学校、高校の学生・生徒がコーディネーターとなり、地域住民、事業所、行政と協働することが期待される。

1. 提案の背景・目的

宇都宮市の総人口は平成30年（2018年）から減少に転じている。0～14歳人口及び15～39歳人口は減少が続く一方で、40～64歳人口及び65歳以上人口は増加しており、宇都宮市正に少子高齢化社会なのである。宇都宮市に限ったことではないが、少子高齢化の中、人々の価値観の多様化、働き方の変化などにより、人と人、人と地域のつながりが希薄となり、地域コミュニティの形成、維持が重要視されている。

これらの現状を踏まえ、地域におけるリアルな人と人との繋がり場の設けるために、「みんなのやなせハウス」という居場所づくりを、地域の方々の支援・協力のもと、今年度（2023年度）実施してきた。昨年度、世代間交流やにぎわいづくりの観点から移動式販売のまちづくり駄菓子屋「おかしのいえ」の活動を展開した。その経験やノウハウを活かし、「おかしのいえ」から発展したのが「みんなのやなせハウス」である。「みんなのやなせハウス」は築瀬地区にある小学校近くの空き店舗を活用した、駄菓子屋及び交流の場である。



写真1 おかしのいえ

学生が主催する「みんなのやなせハウス」には、2つの主要目的がある。一つ目は、学生の斬新なアイデアを地域間及び世代間交流の拠点となる居場所づくりに反映させ、SSCが目指す「地域共生社会」にふさわしい新たなコミュニティの場にしたいということである。二つ目は、SSCの実現に向けて、SSCへの市民の理解と協力を得るための土台づくりを、「みんなのやなせハウス」をモデルとする居場所から始めるということである。そのため、宇都宮市39地区それぞれの特徴を反映した“SSCすごろく”を、学生、地域住民、事業所、行政の協働で制作し、それぞれの居場所で“SSCすごろく”活動を展開するのである。今回、独自に行ったアンケート調査によれば、SSCの認知度は低いことが分かっている（詳細は後述）。「誰ひとり取り残さない」SSCを具現化するためにも、まずは市民の認知度を高めることが重要であると考え*1。



写真2 みんなのやなせハウス外観



写真3 SSCすごろく

2. 提案の目標・課題「私たちがつくる「アスノミヤ」～スーパースマートシティの実現に向けて～」との関連

「スーパースマートシティの実現」に向けて、本提案は以下の点で関連していると言える。

(1) SSCが目指している「地域共生社会」との親和性

既述のとおり、本提案では多世代が交流できる地域の居場所づくりを提案している。居場所の社会的効用については、様々な研究で実証されており*2、また、宇都宮市でも「親と子どもの居場所づくり事業」が推進されているところである。今後、少子高齢化が深刻化するであろう本市においては、さらなる居場所づくりが求められるところであり、その居場所からSSCが目指す「地域共生社会」へと深化することを目指すものである。今回提案している居場所は、第三の場所である、【おばあちゃんの家のような安心する場所】、【気づいたら地域住民が自然と集まっている環境】（サードプレイス*3）を目標としており、宇都宮市39地区それぞれの特徴に応じた居場所づくりを推進するものである。

なお、国は2022年度に「こどもの居場所づくりに関する検討委員会」を設置し、居場所づくりの施策展開に向けて本格的な検討を始めており、本提案はこの国の動向を先取りするものであるとも言えよう。

(2) SSCへの理解度の向上

「みんなのやなせハウス」利用者、宇都宮共和大学の学生に対してアンケート調査を実施したところ、SSCの認知度は高くないことが明らかとなった（詳細は後述）。SSCはこれからのデジタル社会を先取りした、優れた施策であるが、個人情報の活用もその構築には必要となることから、何よりも市民の理解と協力が重要である。このため、まずはSSCへの認知度を高めることが喫緊の課題であり、本提案では、SSCの理解度を高めるため“SSCすごろく”を制作した。今回制作した“SSCすごろく”は主に中心市街地を対象にしているが、今後は、39地区それぞれの“SSCすごろく”を地域住民が主体となって制作し、それぞれの居場所で“SSCすごろく”で多世代が交流しながら、SSCへの理解を高めることを考えている。つまり、スキーム通りに進めることができれば、“〇〇地区SSCすごろく”“△△地区SSCすごろく”というように、39の“SSCすごろく”が揃うことになる。

さらに、SSCすごろくの制作と活動が十分に進んだ地区からデジタル版“SSCすごろく”を創作し稼働することで、居場所以外の場所において広く市民が参加できる宇都宮市独自の仕組

みへと進化させていく。そのことにより、全市民へのSSCの認知度を高めることとする。

3. 現状分析

3.1 宇都宮市の人口動向

『第6次宇都宮市総合計画』（p.12）の「宇都宮市の年齢別（5歳階級）人口の将来推計」によれば、2015年時点で本市の「老年人口」は119,198人であり、「年少人口」は70,907人である。そこに示されている将来人口推計では、2025年の「老年人口」は137,395人と約1万8千人増加し、「年少人口」は62,447人と約8,500人減少することが予測されている。ゆいの杜のように近年人口が増加している地域も一部にはあるが、市全体としては上記のとおり、少子高齢化が進むことになる。

だからこそ、デジタル技術などを活用するSSCによって、より良いコミュニティづくりを本市で取り組むことが重要であると言える。

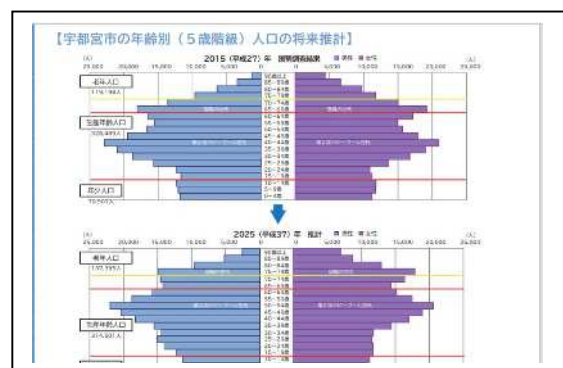


図1 宇都宮市の人口推計
(出典：『第6次宇都宮市総合計画』)

3.2 居場所の必要性と実現性について —「みんなのやなせハウス」の事例から—

「みんなのやなせハウス」は、当ゼミの3年生が昨年度始めたまちづくり駄菓子屋「おかしのいえ」の経験やノウハウを活かし、当ゼミの2年生と3年生が協力して、築瀬地区の空き店舗をお借りして、不定期に開設している地域の居場所である。子どもたちと高齢者など、多世代の交流の機会が失われつつあることから、「リアルな繋がり」の場を設け世代間の交流促進をはかる」ことを主な目的としている。

なお、築瀬地区福祉協議会の方々、空き店舗のオーナーさんのご協力がなければ、本プロジェクトを遂行することは極めて困難であった。大学生と地域との協働の賜物であると考えている。

当ハウスの開設の経緯、活動状況は表1に示すとおりである。来訪者は決して多いとは言え



図2 「みんなのやなせハウス」の看板



写真4 子どもと地域住民で賑わう「みんなのやなせハウス」（2023年6月24日）

ないが、子どもや保護者、高齢者に楽しんで頂き、「また開催してほしい」、「大変満足である」と多くの意見を頂いた。また、当プロジェクトに関わっている学生スタッフの意見としては、「子どもや高齢者の方とお話する機会はなかなかないので、とても貴重な体験になった」などがあった。

「みんなのやなせハウス」の実施状況を振り返れば、地域に多世代で自由に交流できる居場所の重要性は今もって薄れていないということである。また、居場所の開設と運営は金銭的なことも含めて容易なことではないが、今回の取り組みのように、志の高い個人と組織が協働すれば不可能ではないということが分かった。

なお、2023 年 10 月、当ハウスにて“SSCすごろく”でご利用者に遊んでいただいた。その様子やアンケート結果などは後述する。

表 1 「みんなのやなせハウス」開設の経緯と活動状況

時 期	進行状況	イベント内容
2022 年 12 月	地元からの相談	—
2023 年 2 月	活動場所の下見	—
4 月	企画内容検討開始	—
5 月	建物の内見	—
6 月	第 1 回みんなのやなせハウス	駄菓子販売・学習支援・ボードゲーム
9 月	第 2 回みんなのやなせハウス	駄菓子販売・昔遊び
10 月	第 3 回みんなのやなせハウス	駄菓子販売・SSCすごろく

3.3 “SSCすごろく”の効果検証

(1) “SSCすごろく”について

“SSCすごろく”は、子ども、若者、大人、高齢者など多様な世代と一緒に遊びながら、SSCについての理解を深めることを目的とする。このため、SSCの重要な三要素である「地域共生社会」「地域経済循環社会」「脱炭素社会」を、遊びながら学べるということにも配慮している。加えて、私達が暮らす宇都宮市の環境や街そのものについて学ぶことができる要素も取り入れている。

第3回ハウスにて、親子、学生が参加して本すごろくで遊んだ。子どもたちは、すごろく自体を大いに楽しんでくれたことももちろんであるが、「あっ！これは宇都宮のどこ



写真5 “SSCすごろく”で盛り上がっている様子
(2023 年 10 月 21 日)

こにあるよね！」などと自分の街について気づき、理解を深めながらすごろくを行うという効果を確認できた。また、保護者の方々も「宇都宮市のSSCを知るきっかけとしては、こ

のすごろくはとてもアクティブで楽しいものであり、素晴らしい」という声も頂いた。

第3回ハウスで実施したアンケート結果は、次のとおりである。

(2) アンケート調査の結果

2023年10月21日の第3回やなせハウスにて、大人5名、子ども2名を対象に“SSCすごろく”に関するアンケート調査を行った。サンプル数が7件と少数であるため、参考として以下に結果概要を紹介する。

宇都宮市のSSCを知っていたのは、大人4名、子ども1名の計5名であった。ただし、その内容を知っているのは3名のみであり、「SSCの名前だけ知っている＋知らない」では4名となる。

“SSCすごろく”の評価については、「満足した」「楽しかった」が5名であった。“SSCすごろく”の良い点としては、子どもが楽しく遊べる、宇都宮について知ることができる、子どもから大人まで一緒に遊べる、子どもがワクワクしていたという内容の答えがあった。

これらの結果から、SSCの内容を知っている人は多くはないであろうことが推察された。一方、大人も子どもも“SSCすごろく”を高く評価していることから、宇都宮市民のSSCへの認知度、理解度を高める上で、有益なツールになり得ると考えられる。

3.4 若者のSSCの認知度について

これから宇都宮市のまちづくりを担っていく若者達のSSCの認知度等を明らかにするため、宇都宮共和大学シティライフ学部の学生（主に1年生）を対象に、アンケート調査を実施した。実施日は2023年10月15日であり、有効回答数は32件であった。

まちづくりや都市計画を普段の講義で取り上げるシティライフ学部の学生であっても、「SSCの内容を知っている」のは12人（約38%）にとどまった。「SSCを聞いたことがあるが内容は知らない」「聞いたことがない」は共には10人（約31%）であった。つまり、SSCの内容を認知していない学生が6割を超えているのである。アクティブな学生にSSCが伝わっていないのは、大変もったいないことである。

SSCが目指す「地域共生社会」「地域経済循環社会」「脱炭素社会」について、最も実現して欲しいものを一つ選んでもらった。その結果、「地域共生社会」を支持した学生が、18人（約56%）と最も多かった。次いで、「地域経済循環社会」8人（25%）、「脱炭素社会」6人（約19%）であった。

今回の提案では、居場所づくりから地域共生社会への発展・構築を掲げているが、多くの学生が「地域共生社会」の重要性を認識していることが今回の調査で分かった。

4. 施策事業の提案

ここまで、「学生＋地域」協働による居場所づくりの可能性、居場所づくりからSSC「地域共生社会」への進化の展望、居場所における“SSCすごろく”の効果等について検討してきた。以上の検討結果をもとに、本提案では、①宇都宮市39地区での“SSCすごろく”の制作と実施、②「やなせハウスデー」・「よりみちデー」を土台とする「地域共生社会」の創造、③SSC「地域共生社会」＋“SSCすごろく”推進のための協働体制づくりの施策を提案する。

【提案① 宇都宮市39地区での“SSCすごろく”の制作と実施】

本提案では、宇都宮市中心街を概ねの対象エリアとする“SSCすごろく”を制作した。その制作プロセスやノウハウは担当した学生達が持っていることから、私達、さらには市内の大学生、専門学校生、高校生を“SSCコーディネーター”とする。これらコーディネーターが宇都宮市39地区におもむき、各地区の多世代の地域住民や事業所などと協力して、それぞれの地区の特徴を活かした“SSCすごろく”を制作し活動を展開する。“SSCすごろく”を制作するには、地域の現状を把握することが必要であることから、地域を見直すきっかけにもなる。

“SSCすごろく”を制作する過程で、小さい時から子どもたちは自分の地区に興味を持つようになり、地域内での交流の大切さを遊びを通して学ぶことができ、体験的にSSCの理解度を深めることができるのである。

一方、これらコーディネーターだけでは、地域に関する知識が十分ではないことから、各地の高齢者に活躍してもらうことを期待したい。自分の地区に長く住んできたからこそ蓄えられた地元知識をすごろくという道具を扱いながら、子どもたちや地区をあまり理解していない住民に説明するのである。このことにより、子どもや地域住民のSSCへの理解度を高めるとともに、高齢者と子どもなど多世代の地域交流を促進するのである。これは、SSCの「地域共生社会」に直結するものである。

さらに、次のステップとして、デジタル版“SSCすごろく”を創作し稼働する。そのことで、居場所以外の場所において広く市民が参加できる宇都宮市独自の仕組みへと進化させ、全市民へのSSCの認知度を高めることとする。

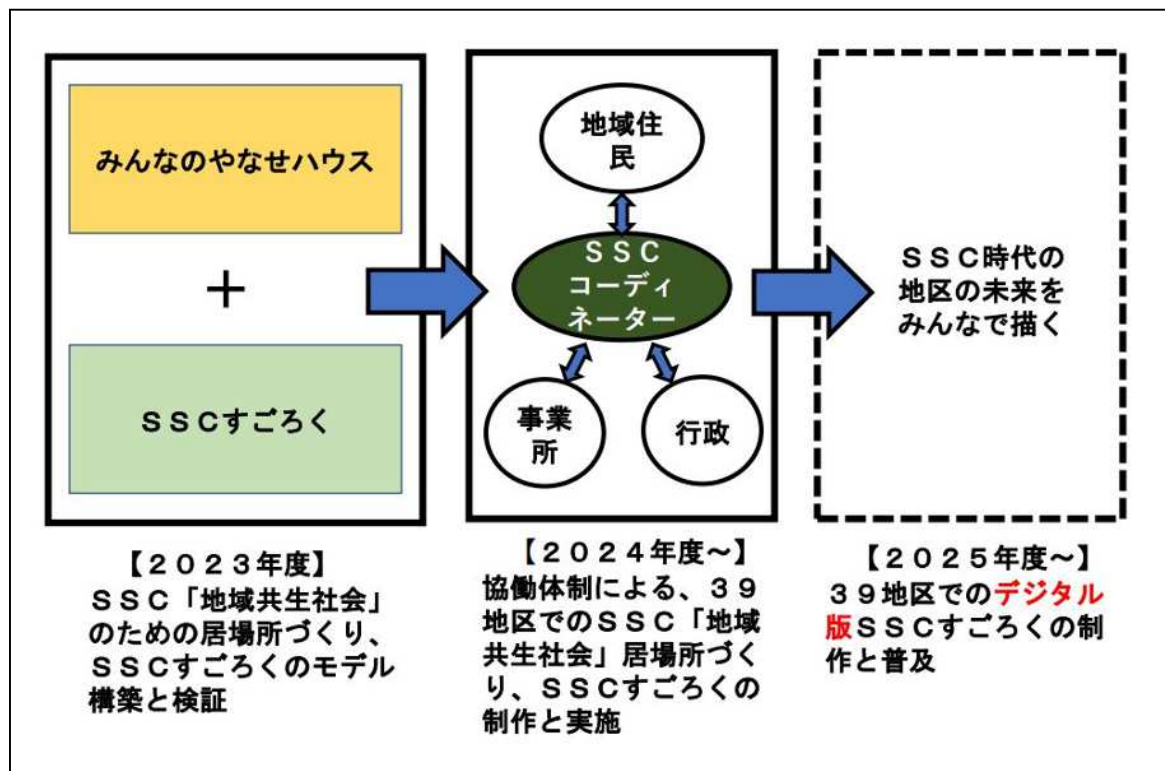


図3 「SSCすごろく」の普及スキーム

【提案② 「やなせハウスデー」「よりみちデー」を土台とする「地域共生社会」の創造】

今回、居場所づくりのモデル（社会実験）として「みんなのやなせハウス」に取り組んだが、開催日は週末に限定されていた。SSC時代の居場所づくりへと進化するには、平日の開催も期待されるところである。なぜなら、平日もオープンしていることで、週末にはハウスを利用できない子どもや高齢者を含む地域住民等が気軽に立ち寄れるようになるからである。その結果、多世代の交流が促進され、地域の活性化につながる展望が開ける可能性がある。

そのため、平日オープンのきっかけとして、「やなせハウスデー」「よりみちデー」のような“特別な日”（＝平日オープン）を設け、駄菓子屋や“SSCすごろく”等のある居場所に立ち寄ってもらえるようにしたい。そのためには、地元小学校などの学校関係者、保護者、地元自治会等の理解と協力が必要であり、大学生、専門学校生、高校生等も運営に参画し、チーム一丸となって持続可能な居場所となっていく道筋を構築する。そのことにより、SSCが目指す「地域共生社会」の土台づくりが可能となると考える。

さらに、「やなせはうすデー」「よりみちデー」をきっかけに、居場所が地域に定着した段階で、SSC「地域共生社会」の創造を目指し、居場所に関わるメンバー場中心となり、様々な取組にチャレンジしていく。子ども食堂、コミュニティカフェ、駄菓子屋併設デイサービス^{*4}、駄菓子屋やカフェ併設の銭湯^{*5}などを、宇都宮市の39地区の特性に応じて開設し、多くの居場所的空間で“SSCすごろく”を通じてSSCへの理解を深めていく。



写真6 デイサービス「ひがし野 真心庵」併設の駄菓子屋「蛭」
(愛媛県松山市)

出典： <https://matsuyama.keizai.biz/headline/418/>



写真7 銭湯「十條湯」併設のレトロ喫茶「深海」(東京都北区)

出典： <https://www.enjoytokyo.jp/article/200084/>

【提案③ SSC「地域共生社会」+ “SSCすごろく” 推進のための協働体制づくり】

市内39地区における居場所を中心とするSSC「地域共生社会」の実現、“SSCすごろく”の展開は、学生と地域住民だけの力では非常に困難である。そのため、行政の「専門性」「ブランド力(周知・影響力)」、デジタル版“SSCすごろく”を制作する際に必要なIT系事業所のノウハウが欠かせないことから官民協働の体制構築を提案する。

このことにより、行政(宇都宮市)は市民へのSSCの認知度と理解を高めていく協働モデルを構築でき、企業はCSR(企業の社会的責任)の一端を担い、地域住民はSSCへの理解を深めるとともに持続可能な地域社会の形成を進めることができる。さらに、この推進体制のハブであるSSCコーディネーターを市内の大学、専門学校、高等学校の学生や生徒が担うことにより、SSCの担い手となる人材育成にもつながるばかりでなく、学生や生徒にとっては実社会の中での得がたい経験や学びを得る機会となるのである。

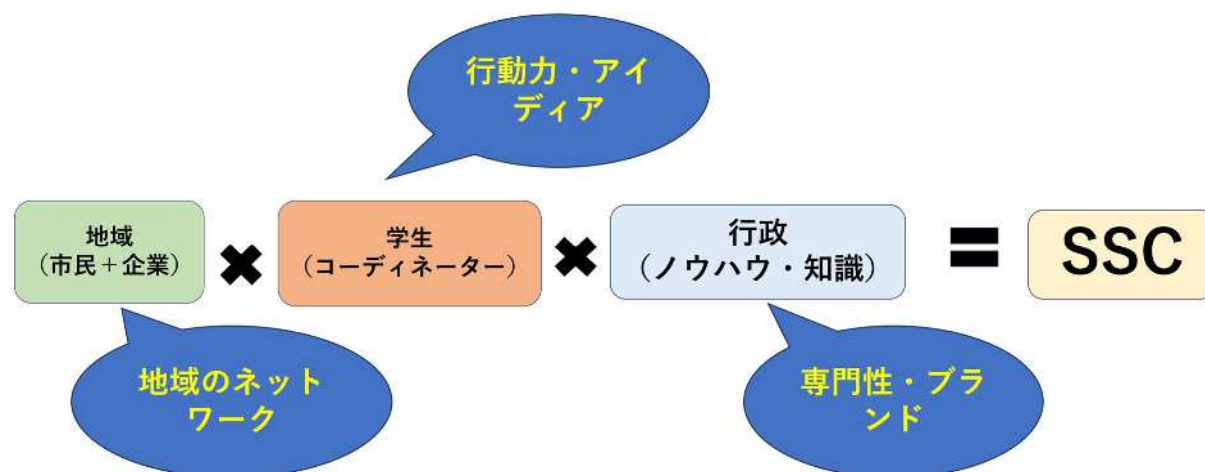


図4 SSC「地域共生社会」と“SSCすごろく”推進のための三者協働

<おわりに>

「みんなのやなせハウス」+ “SSCすごろく”の活動により、地域の方々との絆が深まるとともに、宇都宮市の素晴らしさを再確認できた。今後は、「みんなのやなせハウス」+ “SSC

すごろく”の活動を発展、充実させることで、宇都宮市の「地域共生社会」づくりとSSCの推進に資することができればと考えている。

最後になりますが、「みんなのやなせハウス」＋“SSCすごろく”の活動において、築瀬地区や築瀬小学校の関係各位、店舗の利用を快諾いただいたMさん等に変にお世話になりました。ここに感謝の意を表します。

【補注】

- * 1 カナダのトロント市では、スマートシティ構想が民間会社主導で進められていたが、データプライバシーへの説明不足による市民との軋轢のため撤退したと指摘されている。つまり、本市のSSCにおいてもまずは市民の理解を得ることが第一歩であると言える。
(参考：日経クロストrend、2020年5月27日、
<https://xtrend.nikkei.com/atcl/contents/feature/00025/00010/>、2023年10月27日閲覧)
- * 2 山崎（2023）によれば、外出することの心身への寄与は特に高齢者にとって大きいことが明らかになっている。つまり、外出の目的先となる居場所は高齢者にとって重要と考えられるのである。また、居場所の数が多い子どもほど、自己肯定感や社会貢献意欲が高いことが、『令和3年版子供・若者白書』（内閣府、2021年）に示されている。
- * 3 サードプレイスとは、地域社会における自宅や職場とは隔離された、心地のよい第3の居場所のことである。
- * 4 愛媛県松山市のデイサービス「ひがし野 真心庵」には、地域の高齢者や子どもたちが気軽に立ち寄れるよう、駄菓子屋「蛸（ホタル）」が併設されている。
- * 5 東京都北区にある銭湯「十條湯」にはレトロカフェ（喫茶「深海」）が併設されており、幅広い年齢の地域住民が利用している。

【参考文献】

- ・ 山崎幸子：高齢期における外出と心身の健康－閉じこもり高齢者に対する調査結果から－、生活協同組合研究、Vol. 572、12－19、2023年。
- ・ 内閣府：令和3年版子供・若者白書、2021年。
- ・ 第6次宇都宮市総合計画、2018年。
- ・ 広報うつのみや 夢や希望がかなうまち「スーパースmartシティ」、
https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/028/096/202112mihiraki.pdf。（2023年10月21日閲覧）